

# 少子・超高齢化社会における 活力あるコミュニティの形成研究 (1)

— 千葉の子育てとその歴史的考察を手がかりに —

高野 良子<sup>[1]</sup>, 小池 和子<sup>[2]</sup>, 栗原ひとみ<sup>[1]</sup>, 高木夏奈子<sup>[1]</sup>,  
實川 慎子<sup>[1]</sup>, 中野 聡子<sup>[2]</sup>, 山田 千愛<sup>[1]</sup>

[1] 植草学園大学発達教育学部, [2] 植草学園大学保健医療学部

我が国の2016年度の出生数は、100万人を割る「ミリオン・ショック」が現実のものとなり、高齢化率も過去最高を更新し、少子・超高齢化社会が一層進行している。

本研究は、本学の学部の特徴を生かした教育・保育・保健医療分野の有機的な繋がりを軸に、活力あるコミュニティをいかに形成するかをテーマとした研究の第一報である。

本論は、近世後期、上総・下総国（現在の千葉県）において展開された子育てを手がかりに、文献及び現地調査に基づいて2点から考察した。(1) エドワード・S・モースらが捉えた江戸期の子育てを光の側面として、(2) 絵馬等にみられる間引き・子返しという風習を影の側面として検討した。

結果、モースらが評価した日本の子宝的子供観に立脚する「育てる子」と、一方、嬰兒殺しや捨子という選択を余儀なくされた「育てない子」という〈子育ての選別〉が行われたことを論じ、社会全体で次世代を育成する社会システム構築のための基礎資料を提示した。

**キーワード**：少子・高齢化社会、子育て、コミュニティ、間引き、次世代育成

## 1. 問題の所在

万葉の時代から、人々は「子は宝」といい、子の親だけでなく、地域社会も子の誕生を喜び祝い、子を大切に育てようとしてきた。本学が立地する千葉市若葉区は、日本最大級の貝塚として知られる加曾利貝塚や、徳川家康が九十九里方面へ鷹狩りに出かけるために作られたとされている御成街道などの多くの歴史的遺産を有している。我が国は、世界に冠たる健康長寿社会を実現しつつも、産業構造の変化等に伴う地域社会の教育力の低下や人間関係の希薄化がいわれて久しい。今や、年間出生数の百万人割れ、所謂「ミリオン・ショック」が現実となった。また、総務省統計局による総人口に占める高齢者人口の割合も過去最高（人口推計 2017年9月現在、27.7%）を更新し、未曾有の少子・超高齢化社会に

突入しようとしている。

少子社会と超高齢社会の用語については、前者は、周知のように、少子化とは、出生率が低下して、子供の数が減少することであるが、1992年の『国民生活白書』で使われた語である。そして、同白書では、子供や若者が少ない社会を少子社会と表現した。2016年度（確定値）の我が国の年間出生数は976,978人で、戦後最低の出生数（厚生労働省、2016）となった。後者は、世界保健機関（WHO）と国連の定義を用いた。世界保健機関（WHO）や国連の定義では、高齢化率（総人口のうち65歳以上の高齢者が占める割合）が7%を超えた社会は「高齢化社会」、14%を超えた社会は「高齢社会」、21%を超えた社会は「超高齢社会」としている。なお、本論では、「こども」の表記は、引用の原文以外は、「子供」で統一している。

さて、地域社会に目を転じると、万葉の歌人、山上憶良の「銀も金も玉も何せむに、優れる宝子にしかめやも」を引用するまでもなく、古より、子を大切に育てようという「子育て思想」が広がり、子供の健やかな成長を願い、地域社会と共に展開される行事が多くある。例えば、産まれた子を連れて土地の守り神に初めてお参りする「お宮参り」、晴れ着姿で氏神に参拝し、子の成長を地域共同体の人々と共に祝う「七五三」などの通過儀礼に見るように、子育ては家族のみならず地域共同体の重要な仕事であった。子供を育てることは、プライベートなことではなかった。

近世・近代の子育て論に目を向けると、例えば、幕末の農政学者として知られる佐藤信淵は、我が国ではじめて保育施設の設立を提唱し（佐藤 1878）、随胎や間引きが日常化していた当時の貧しい農村を再建しようと真剣に考えた。また、今野（1988）、中江（2003）、太田（2007）らは、豊かな人間形成力をもつ江戸期の子育てに着目し、今日の価値多様化時代にふさわしい共感能力の根はいかにしたら再構築できるかを論じている。

2011年3月11日の東日本大震災を契機に、人と人との絆やつながり、あるいは信頼・規範・人的ネットワークの意味で捉えられるソーシャル・キャピタル（社

会関係資本）の重要性が再認識されている。「少子高齢化社会の地域の活性化は、多様なソーシャル・キャピタル、地縁的な人間関係や人的・社会的ネットワーク、すなわち多様な人的ネットワークが緩やかにつながることによって構築されるのではないか。」と高野（2013, p. i, p. 107）が述べるように、少子・超高齢化社会にある今、社会全体で次世代を育てることの現代的意義や課題を問うことが求められている。

そこで、本稿は、「少子・超高齢化社会における活力あるコミュニティの形成研究」の第1報として基礎研究と位置付け、千葉の子育ての諸相を歴史的に考察する。

## 2. 研究目的と方法

少子・超高齢化社会は日本全体の課題である。本研究は、資料調査及びフィールド・ワーク（現地調査）に基づき、近世後期、上総・下総国（現在の千葉県）において展開された子育てを手がかりに、次の3点から、少子・超高齢化社会における活力ある地域コミュニティ社会形成に向け、「社会全体での子育て」の時代的要請と意義を検討する。

1. 史資料等により、外国人の目を通した日本人の子育て観・子育て評価について整理する。

●本研究の現地調査は、以下5か所で実施した。

表1 千葉県及び千葉市若葉区御成街道周辺の子育てに関わる現地調査一覧 ( ): 調査実施日

建立・奉納年	石仏・絵馬等	設置場所等
① 1799 (寛政11) 年	若葉区大草寺「十九夜講中」の銘のある子安塔 (2017. 5. 27)	真言宗豊山派若宮大草寺は、金親村金光院末寺であったが、現在は無住。千葉寺十善講（四国八十八箇所を模して、千葉市・四街道市・佐倉市などの寺院に弘法大師（空海）を祀った札所を設け、巡拝して廻るもの）の第79番札所。
② 1786 (天明6) 年	且谷町薬師堂公民館脇、観音像と子安塔 (2017. 5. 27)	千葉市若葉区の北東部のはずれ、且谷町のY字路脇に、如意輪観音像と子安塔が置かれている。
③ 1792 (寛政4) 年	千手院（千葉市中央区星久喜町）には千手院住職堯（1792年没）の筆子塚と子安塔が3体置かれている。 (2017. 7. 23)	1133(長承2)年、永福寺(中央区大宮町)の末寺として創建された。住職の堯海和尚が、寺子屋を開き、この寺は星久喜地域の江戸期教育の発祥の地と推察される。1798(寛政10)年千手院の子安塔は、懐に赤子を抱き、右足を立てて座っている構成で、大草寺等の子安塔とよく似ている。
④ 1847 (弘化4) 年	弘誓院（柏市柳戸）間引きの絵馬 (2017. 5. 26)	柏市柳戸に、真言宗豊山派の弘誓院がある。寺の本堂に、畳2枚ほどもある極彩色の大きな絵馬が掛っている。村人によって奉納された「間引きの絵馬」である。
⑤ 1889 (明治22) 年 9月17日に奉納	笠森寺（千葉県長生郡長南町笠森）間引きの絵 (2017. 8. 19)	天台宗別格大本山坂東三十三箇所の第31番札所であり、笠森観音でも知られている。絵馬の奥には、水子地藏が安置されている。

2. 本県を中心とした子育てに関わる現地調査に基づき、近世後期の子育てをめぐる諸相を考察する。
3. 上記の分析に基づき、少子・超高齢化社会における活力あるコミュニティ社会形成に向け、持続可能な子育てネットワークキング構築のための基礎資料の提供に資することを目的とする。

### 3. 外国人による日本の子育て評価

江戸時代に来航し、鎖国をしていた日本に開国を迫ったアメリカ海軍の軍人、マシュー・カルブレイス・ペリー (Matthew Calbraith Perry, 1794年－1859年) は、街中の本屋の店頭には多様な本が並び、江戸の人々がそれらを求めていることに驚きを隠さなかった。特に、女性の識字能力の普及についても言及し、女性独特の芸事に熟達していることも併せて記している (ペリー, 1948, p. 140)。幕末期に来日した何人も外国人がさまざまに日本紀行を著している。それらの紀行文の中にどのような日本人の子育て観や教育観を読み取ることができるだろうか。幕末前後を中心に、来日順に彼らの日本評価を追ってみる。

#### 3.1 ゴローニンの教育評価：読み書きができる日本人

19世紀初め、1811年(文化8年)に日本にやってきたロシア人のヴァシーリー・ミハイロヴィチ・ゴローニン (Vasilii Mikhailovich Golovnin) は、日本での幽囚体験と観察から成る手記(森川, 2012, p. 91)を綴っている。彼は、士官2人と水夫数名と共に不法入国を理由に捕らえられたロシア軍人であり、北海道函館で2年2ヶ月に及ぶ獄中生活を送ることになった。その中で、日本国民の識字能力の高さに驚いて、「日本の国民教育については、全体として一国民を他国民と比較すれば、日本人は天下を通じて最も教育の進んだ国民である。日本には読み書きのできない人間や、祖国の法律を知らない人間は一人もない」(ゴローニン, 1816, p. 31)と記した。

#### 3.2 シュリーマンの教育評価

考古学者であり実業家でもあるハインリッヒ・シュリーマン (1822－1890) は、日本の幕末、

1865年6月1日～9月2日の3ヶ月間にわたって日本に滞在している。彼は、『シュリーマン旅行記 清国・日本』の中で、日本の教育・保育を次のように評している。因みに、シュリーマンは、トロイア遺跡を発掘したことで、広く知られている。その発掘は、日本訪問から6年後の1871年とされて、シュリーマン49歳のことである。

サントーペテルズルクへ帰るとすぐに、友人たちはきっと、私が日本の文明をどう見たかと尋ねるに違いない。私のほうは答える前に、こう言わざるを得ない。すなわち「君は文明という言葉をどのように理解しているか？」と。もし文明という言葉が物質文明を指すなら、日本人はきわめて文明化されていると答えるだろう。(略) それに教育はヨーロッパの文明国家以上に行き渡っている。シナを含めてアジアの他の国では女たちが完全な無知のなかに放置されているのに対して、日本では、男も女もみな仮名と漢字で読み書きが出来る。(ハインリッヒ・シュリーマン, 1998, p. 167)。(下線は、引用者による。以下同様。)

さらに、シュリーマンは、江戸の読み書きの様子を次のように詳細に記している。

教室は間口いっぱいが道路に向かって開かれていた。もちろん椅子もテーブルもない。四～六歳の男児たちが六十人ほど、莫藎の上に座り、各々一巻きの紙を持っては、斜めに置かれた黒板の上に教師が白墨で書いて行く言葉と、その読み方を真似ていた。(略)日本語には様々な文字があり、まず漢字を使って書くことが教えられるのだということが理解できた。(『前掲書』p. 152)

#### 3.3 モースの子育て評価

次いで、1877(明治10)年に来日し、大森貝塚を発掘したことで知られている東京大学の初代動物学教授をつとめたエドワード・S・モースは、著書『日本その日その日』の中で、19世紀後半の日本社会の姿を描いている。彼は、「日本ほど赤坊のために尽す国はないと確信」し、「日本が子供達の天国だ」と日本の子育てを高く評価している。

婦人が五人いれば四人まで、子供が六人いれば五人までが、必ず赤坊を背負っていることは誠に著しく目につく。…略…赤坊が泣き叫ぶのを聞くことは、めったになく、又私はいま迄の所、お母さんが赤坊に対して癩癩を起しているのを一度も見ていない。私は世界中に日本ほど赤坊のために尽す国はなく、また日本の赤坊ほどよい赤坊は世界中にないと確信する。いろいろな事柄の中で外国人筆者達が一人残らず一致する事がある。それは日本が子供達の天国だということである。この国の子供達は親切に取扱われるばかりでなく、他のいずれの国の子供達より多くの自由を持ち、その自由を濫用することはより少なく、気持ちのよい経験の、より多くの変化を持っている。赤坊時代にはしょつ中、お母さんなり他の人人なりの背中に乗っている。(エドワード・S・モース, 1970, p. 11)

### 3.4 バードの子育て評価

英国の女性紀行作家として知られるイザベラ・バード (Isabella L. Bird 1831年 - 1904年) は、明治時代、東北や北海道、関西などを旅し、旅行記“Unbeaten Tracks in Japan” (『日本奥地紀行』) を著した。バードはモースが来日の翌年、1878 (明治11) 年6月に日光・新潟・山形・秋田を経て北海道に渡り、アイヌ人の村落を調査した。バードにとっては、初めてのアジア地域での旅行だったという。『日本奥地紀行』には、次のような記述をみることができる。

私は、これほど自分の子どもをかわいがる人々を見たことがない。子どもを抱いたり、背負ったり、歩くときには手を取り、子どもの遊戯をじっと見ていたり、参加したり、いつも新しい玩具をくれてやり、遠足や祭りに連れて行き、子どもがいなくていつもつまらなそうである。

いくつかの理由から、彼らは男の子の方を好むが、それと同じほど女の子もかわいがり愛していることは確かである。子どもたちは、私たちの考えからすれば、あまりにもおとなしく、儀礼的にすぎるが、その顔つきや振舞いは、人に大きな好感をいだかせる。(イザベラ・バード, 1871, p. 86)

### 3.5 近世・近代社会における教育・子育て評価

上述した4人の外国人による日本の教育・子育て評価を、著作年順に整理してきた。

彼らは、「子育て上手の先進国」(グローニン)、「これほど自分の子どもをかわいがる人々を見たことがない。」(バード)、「日本は子どもの天国」(モース)などと絶賛した。このように、日本にやってきた多くの外国人による、日本人の子育てや教育についての好意的な記述が目立つ。紙幅の都合上4例に留めたが、他にも、イギリスの社会学者ロナルド・ドーア (1970) らによる、日本の教育・子育てに対する称賛の声は枚挙にいとまがない。

しかし、その信頼度という点からは、問題がないとは言えないであろう。近世社会は、読み書きが民衆の中に爆発的に普及した社会 (井出, 2014, p. 208) であった。近世後期から幕末にかけての教育熱の高まりについて、例えば、近世地域教育史の研究者である木村政伸は、外国人による日本文化に関する評価を次のように論じている。ここでの日本文化とは、世界有数の教育国という観点から、いかに日本の識字率が高いかについての論である。

正確に識字率を検証することの難しさ、彼らが見聞した日本人の地域や階層の違い、比較したロシアやアメリカの状況、さらには彼らの文明観との関係もあり、必ずしもそのまま受け止めるわけにはいかない。しかし、世界的にみて、近世日本社会に文字文化が広く普及したことは特筆すべきことであるといつてよいであろう。(木村, 2012, pp. 91 - 92)

人間は、生涯にわたり人として成熟・発達していく存在である。その自立 (自律) 的存在 (生存) にとって欠かせない社会化を果すには、より体系的組織的な教育的かかわりが重要な役割と意義をもつといえよう。人間とは、後天的に能力を獲得する存在である。ゆえに、乳幼児期・子供期には大人たちの教育的働きかけが不可欠である。

木村 (2012) が論じるように、時代性や社会性という観点からも、彼らの評価をそのまま受け止めることは適当ではない。しかし、現代・未来の教育・保育の問題を考えるにあたって、外国人によって高

く評価されていることは、日本の子育て評価や教育文化評は、耳を傾けるに値する。なぜなら、日本を訪れた外国人たちは日本以外の諸国を見ており、それらの比較から、日本人の生活態度や日本文化を美点として捉え賞賛したのである。歴史から学ぶ意味を、ここに見出すことができよう。

それでは、上記事実の背景となる近世社会の子育ては、どのようであったのだろうか。次節では、現在の千葉県に相当する地域、すなわち江戸期の上総国・下総国を中心に探してみたい。

#### 4. 近世後期社会の子育てをめぐる光と影

前節では、我が国を訪れた外国人によってスポットライトが当てられた近世社会の子育ての、ある意味では光（ひかり）の部分のみを見てきた。その一方で、地域共同体の中では、どのような子育てが展開されていたのだろうか。

近世社会は、子供たちをいかに慈しみ・愛しみ・育んだのであろう。対象の地域社会を江戸期の上総国・下総国（現在の千葉県）を中心に探してみたい。

まず、倫理観・生命観やプロダクティブ・ヘルス等の観点から、非人道的な出生をめぐる諸問題として間引き・子返しあるいは捨子などの問題を地域社会はどう捉えてきたかを検討する。この問題は、これまでもさまざまに検討（沢山，2003. 豊島，2016）されてきているが、房総の村々ではどのようにこの問題に向き合ったのであろうか。なお、ここでは、『広辞苑』第5版により、「間引き」とは、農作物の栽培で行われるまびくこと、あるいは間隔をあけることに「間引き」の言葉を借りて、口減らしのために親が生児を殺すことと捉えた。また、「子返し」とはすなわち「間引き」のことであるが、子供は7歳までは神の子とされ、いつでも神に返すことができるという解釈からの用語と規定して論じることとする。

##### 4.1 弘誓院の絵馬

千葉県柏市柳戸に真言宗豊山派の弘誓院がある。北総地帯に位置する手賀沼に程近い寺である。寺の本堂に、畳2枚ほどもある彩色の大きな絵馬が掛っている。資料1「弘誓院「間引きの絵馬」(表1-④)」にみる

ように、絵馬の右下段には、産後間もない母親が、生まれたばかりの赤子の口を押さえて、鬼の形相で布切れをかぶせて殺害している様子が描かれている。

1847（弘化4）年、村人によって奉納された「間引きの絵馬」である。寺によると、奉納の趣旨は、『西国秩父坂東百堂順拝諸願成就』と書かれているように、村人が連れだつて秩父に巡礼し、立ち寄った菊水寺の間引き絵馬（秩父市HP）を見て驚嘆し、村に帰って、絵師に依頼してこの絵馬を奉納したものであろう」という。背面に書かれている文字の解説（沼南町史編さん委員会，2004，pp.190－191）は、容易には困難であるが、子供が多いからといって子殺しするのは、犬畜生にも劣る行為であり、間引きをきつく戒めた内容であることを概ね読み取ることができる。

この種の絵馬は、江戸後期から明治の中頃までに、関東圏の寺院等に奉納された事実がある。例えば、茨城県の徳満寺や埼玉県菊水寺などにも、人々の「子殺し」という風習を戒める目的で寺院に納められ、保存されている。因みに、茨城県布川にある徳満寺の本堂の廊下に「間引き絵馬」（利根町HP）が掛けられている。絵馬の図柄もまた「母親が必死の形相で生まれたばかりの子供の口をふさいでいる」という悲惨なものであり、弘誓院の絵馬とよく似ている。民族学者の柳田国男は、「布川のこと」（2010，p.39）の中で、徳満寺の絵馬に、多感な少年時代に遭遇したことを書いている。後年、「間引き」「子殺し」「子返し」が世に知られるきっかけともなった絵馬である。

資料1 弘誓院「間引きの絵馬」(表1-④)



写真掲載は住職に許可を得ている。以下資料1・2も同様である。

## 4.2 笠森寺の絵馬

千葉県長南町にある笠森寺にも、「間引きの絵馬」(資料2『笠森寺間引きの絵馬』(表1-⑤))が、欄間の鴨井部分に掲げられている。笠森寺は、岩の上に建てられた笠森観音堂があり、国の重要文化財にも指定されていることでも広く知られている。この絵馬が奉納された時期は、先の弘誓院より40年以上も後のことである。江戸時代後期から明治の中頃まで間引きの慣習が続いていたかは定かではないが、笠森寺への奉納日は、「1889(明治22)年9月17日 鶴舞 永嶋吉亮 謹書」と辛うじて判読できる。構図は、絵馬の上部に観音様と、その下には出産間もない婦人と鏡に写るその婦人の顔が描かれている。つまり、一人の婦人が、産んだばかりのわが子を押しえつけて殺そうとしている凶柄である。鏡に写る婦人の顔は恐ろしい鬼になっている。それを見て観音が嘆いているという構図である。寺院の説明文にも、「この絵馬は、浜松からの移住者の奉納だが、こうした風習を戒め、犠牲になった胎児の後生を、観音に祈願したのであろう。長南町笠森寺」と記載されている。

江戸時代後期以降、享保の大飢饉(1732)をはじめ、うち続く大飢饉や災害等により、諸国の農村は荒廃していったという歴史がある。この千葉県南部の房総も例外ではなく、人々は、非人道的で悲惨な行為とはわかっていても、生きのびるために、各地でこの絵馬のような「間引き・子返し」が行われたことは否定できない。

資料2 笠森寺「間引きの絵馬」(表1-⑤)



## 4.3 近世後期にみる「赤ちゃんポスト」

2017年5月、熊本市にある慈恵病院に「このとりのゆりかご」、いわゆる「赤ちゃんポスト」が設けられて10年になったことを『佐賀新聞』(2017)が報じている。ポストは、望まぬ妊娠や事情のある女性のいわば駆け込み寺である。熊本市は、ポストの設置に踏み切った我が国で唯一の自治体である。このようなポストは、他の自治体には広がっていないが、これまでに130人の幼い命を救ったという。

他国では、例えばドイツは2000年から、チェコは2005年から「赤ちゃんボックス」を、オーストラリアは2001年から「赤ちゃんの巣」(渥美編著, 2014, pp. 14-34)を設置し、世界のゆりかごは究極のセーフティネットとして機能している。

近世後期の農村社会にも、現代版「赤ちゃんポスト」に似たシステムを導入した人物がいる。大高善兵衛(1822-1894)である。上総富田村(現在の千葉県山武市)の名主を代々務めた家に生まれた彼は、家の門前のかけ札に、「困窮にして育てかねの初生の児、…略…寄るべなき孤児あらばわれに与うべし」(『前掲書』)と記した。この行為は、紛れも無く子育てに関わる社会事業である。既述の間引きの絵馬のように、この地域だけでなく、江戸時代は、米の不作や飢饉等によって、たちまち食べていけなくなるような貧しい農民が大勢いた。そのため、産まれてきた赤子を育てない間引きという望ましくない習慣が古くからあったという。この間引きの悪習をやめさせ、多くの乳児を育てた功績を讃えて、「子育て善兵衛」と称されていることが、山武市の公式HP(2013)の「市ゆかりの人々」の中で、以下のように紹介されている。

善兵衛は、その悪い習慣をやめさせるため、多くの赤ちゃんを引き取って育てたので「子育て善兵衛」とよばれました。

明治期に入り、初代千葉県知事柴原和は、大高の事業に理解を示し、1893年2月28日、表彰し銀杯を与えている(『前掲書』)。乳児救済や貧困解消に尽力した大高善兵衛の功績は高く評価されてよい。

#### 4.4 佐倉藩による「子育て教諭掛」の設置

それでは、間引きを戒めるための方略は、上述した絵馬の奉納や大高による捨て子の救済以外にはどのような施策がとられたのであろうか。

人口の減少は、支配者に年貢(税)を納める農民の減少という問題を招くことになる。その対策として、例えば、佐倉藩では人口減少に危機感を持ち、1838(天保9)年には人口増加政策をとっている(畑中, 2011, pp. 115 - 119)。佐倉藩主堀田正睦(1810 - 1864年)(佐倉市HP, 2012)は、西洋の学問を奨励し、幕末期の老中として、動乱の日本を開国に導いたとしている。また、藩主は「子育て陰徳講」を設立し、「お上より1000両出資し、あと100両を領地の中で加入金を募集し、このお金を年一割の利息で貸し付け、その利息で貧しい者を助ける」という策を講じている。

資料3「大草寺 十九夜講中の銘のある子安塔」(表1-①)



さらに、子供を間引く行為をした親からも罰金を収入(石高)に応じて徴収した。名主、組頭、百姓代という村の役人達にも連帯責任で罰金を課し、基金につぎ込むという策を打ち出している。この事務担当として「子育て教諭掛」を置き、奉行、代官、手代を任命して村々を巡回させ、間引きをしないように指導したようである。その証として、徳川家康が造った御成街道に近い現在の千葉市若葉区大草町の

地に、1857(安政4)年と1862(文久2)年に「佐倉藩の子育て教諭出役2名が宿泊した」という古文書(平凡社地方資料センター, 1996)が残っている。

現在は廃寺となっているが、その地の大草寺には、1799(寛政11)年作の出産と育児の安全を願う子安塔(資料3「大草寺 子安塔」表1-①)が、太子堂傍らの小さな祠に祀られている。石塔の左上には、「十九夜講中」の文字が刻まれている。一般には、十九夜講とは、月の19日に行われることが多い関東地方でみられる行事(松村明, 2006)である。安産や子育て、子供の健康を祈願する女性の集まりとして知られ、子安講とか子安観音の講と呼ばれ、関連の子安塔(表1-②③)も県内に多く残されている。これらは、近世以降の家庭教育支援(子育て支援)システムとしての機能を果たしていたと捉えられよう。

#### 4.5 「育てない子」という選択

2つの間引きの絵馬と、善兵衛による子育て支援事業、子育て教諭掛についてみてきた。いずれも、千葉県あるいは千葉市若葉区、近世後期という限定的な時間軸での事例をとおして、地域共同体の人々の子育て観を探った。

産まれてきた赤子を「育てない子」にするという選択が「間引き」という決断であった。県内2カ所、柏市の弘誓院と長南町の笠森寺に間引きの絵馬が保存されていた。これら絵馬が作られた目的は、間引きの事実を記録することや子への供養だけではなく、これら2つの絵馬を奉納し、それを今日まで大切にしてきた人々の思いは、「間引きは罪悪である」と、厳しく諭し、戒めたのである。善兵衛もまた赤ちゃんポスト事業を通じて、間引きの悪習に警鐘を鳴らしたのである。佐倉藩の子育て政策も然りであろう。

### 5. まとめと今後の課題

先に述べたように、厚労省によると、2016年度の出生数は、100万人を割る「ミリオン・ショック」が現実のものとなった。総務省による高齢化率も、2017年9月現在の推計によると、27.7%と過去最高を更新し、少子・超高齢化社会が一層進行してい

る。本研究は、本学の学部の特徴を生かした教育・保育・保健医療分野の有機的な繋がりを軸に、活力あるコミュニティをいかに形成するかをテーマとした研究の第一報という位置付けで本県での現地調査等を実施した。

近世後期、上総・下総国（現在の千葉県）において展開された子育てを手がかりに、大きく次の2点から考察した。(1) 文献をとおして、日本を訪れたエドワード・S・モースらの外国人の目が捉えた江戸期の子育てを光の側面として、(2) 現存する絵馬等の現地調査に基づき、間引き・子返しという悪しき風習を影の側面として検討した。

結果、江戸期においては、モースらが高く評価した日本の子宝的子供観に立脚する「育てる子」と、一方、嬰兒殺しや捨子という選択を余儀なくされた「育てない子」という、〈子育ての選別〉が行われたことを論じた。「育てない子」の存在は、「育てる子」への深い慈しみの子育てへと人々を向かわせたことが示唆される。加えて、地域社会には網の目のように張めぐらされた子育てネットワークキングが機能していたことを指摘した。子安塔や十九夜講、あるいは十九夜観音などに代表される寄り合いの場と生活文化の祈りの場が形成されていた。それが、成熟した世代から未熟な世代への教育＝文化の伝承であった。情報の共有や、よりよく生きる知識・技術が伝達されていったのであろう。生活に根を張る生涯学習そのものである。近世後期のコミュニティが育んできた子育てのストラテジーである。

少子・超高齢化社会の今ゆえに、「一人の親も一人にしない・子育て世代を一人にしない」緩やかな子育てネットワーク社会の形成が急がれる。日本がまだ近代化する以前の伝統社会では、子育ては地域全体で行われ（荻谷, 2003. pp. 119 - 120）、子供は親だけが育てるのではなく、出産の時に子供をとりあげてくれた人（取上親）、お乳をくれた人（乳親）、子供に名前をつけてくれた人（名付親）などの仮の親が、意図的に、しかも複数つくられた。

だが、現代の子育てはもっぱら各家庭、親にその責任があるようになっている。また子供を育てる環境としての地域社会はさまざまな困難を抱え、親とくに母親は密室に近い環境で育児に奮闘することを余儀なくされている。母親が一人悩みながら子育て

をしないための緩やかなネットワークづくりが大切である。本論は、社会全体で次世代を育てることの意義を問うための基礎資料の提示としたい。

小泉（2007）は、江戸時代は子育て論が開花・爛熟した時代と評している。本論でも検討したが、江戸時代には地域の子育て支援プログラムが多彩に展開されていた。一人の子供に大勢の「仮の親」が登場し、子育てのネットワークを深めてきた。子育てに関わる基礎研究をさらに進め、歴史の中に、少子社会の子育て力の指針を得ることを今後の課題としたい。

## 謝辞

本研究は、植草学園大学研究ブランディング事業研究の助成を受け、2017年度から5年間の計画で実施中です。本論は、その第1報となります。お忙しい中、調査にご協力をいただいた関係各位に心からの感謝の意を表します。

## 引用・参考文献

- 渥美雅子編著(2014).『家族をこえる子育て』東京:工作舎.  
千葉県佐倉市公式HP(2012).「佐倉市ゆかりの人物」(<http://www.city.sakura.lg.jp/0000001057.html>)  
(参照 2017. 8. 13.)  
千葉県山武市公式HP(2013).「山武市ゆかりの人物」(<http://www.city.sammu.lg.jp/site/kids/yukari.html>)  
(参照 2017. 9. 30.)  
エドワード・S・モース (1970).『日本その日その日』石川欣一翻訳, 東京:平凡社.  
荻谷剛彦他 (2003).『教育の社会学』(pp. 119 - 120) 東京:有斐閣アルマ.  
ハインリッヒ・シュリーマン (1998).『シュリーマン旅行記』石井和子訳, 東京:講談社.  
茨城県利根町公式HP「徳万寺間引き絵馬」「柳田國男記念公苑」,<http://www.town.tone.ibaraki.jp/>(参照 2017. 10. 6)  
井出草平 (2014).「江戸時代の教育制度と社会変動」『四天王寺大学紀要』第 57 号.  
イザベラ・バード (1871).『日本奥地紀行』, 時岡敬子翻訳, 東京:講談社.  
今野信雄 (1988).『江戸子育て事情』東京:築地書館.



- 小泉吉永 (2007). 『「江戸の子育て」読本』東京:小学館.
- 木村政伸 (2012). 「近世社会と7学びの文化」『教育史入門』森川輝紀・小玉重夫編著, 東京:放送大学教育振興会.
- 厚生労働省 「平成28年(2016)人口動態統計(確定値)の概況」2017年9月15日公表. <http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/kakutei16/index.html> (参照2017.10.6)
- マシュー・ペリー(1948).『日本遠征記 4』東京:岩波文庫.
- 松村明編 (2006). 『大辞林 第三版』東京:三省堂.
- 森川輝紀・小玉重夫編著 (2012). 『教育史入門』東京:放送大学教育振興会.
- 中江和恵 (2003). 『江戸の子育て』東京:文芸春秋.
- 大高栄一 (1978). 『子育て善兵衛物語—上総国で間引きとたたかう』ふるさと文庫, 千葉県:崙書房.
- 畑中雅子 (2011). 『千葉の歴史話』pp.115 - 119. 東京:国書刊行会.
- 平凡社地方資料センター (1996) 『日本歴史地名大系 12—千葉県の地名』平凡社(「書諸留帳」平川家文書)
- 太田素子 (2007). 『子宝と子返し』東京:藤原書店.
- ロナルド・ドーア(1970).『江戸時代の教育』松居弘道翻訳, 東京:岩波書店.
- 佐藤信淵 (1878). 『垂統秘録』東京:有隣堂.
- 『佐賀新聞』(2017.5.10) 佐賀県:佐賀新聞社.
- 沢山美果子 (2003). 「近世後期の出生をめぐる諸問題」『順正短期大学研究紀要』32号, pp.20 - 45.
- 沼南町史編さん委員会 (2004). 『沼南町史(旧手賀沼村の歴史)』近世資料Ⅱ, 東京:ぎょうせい.
- 高野良子編著 (2013). 『少子社会の子育て—豊かな子育てネットワーク社会をめざして—』東京:学文社.
- 栃木県秩父市HP. 「菊水寺子返しの図」(<http://www.city.chichibu.lg.jp/4225.html>) (参照2017.8.13.)
- 豊島よし江 (2016). 「江戸時代後期の墮胎・間引きについての実状と子ども観(生命観)」『了徳寺大学研究紀要』10号, pp.77-86.
- ヴァシーリー・ミハーイロヴィチ・ゴローニン(1816). 『日本幽囚記 下』斉藤智之(翻訳:1943), 東京:岩波書店.
- 柳田国男 (1989). 「布川のこと」『故郷七十年』兵庫:神戸新聞総合出版センター.

## Abstract

### **Research on the Formation of Vibrant Communities in an Aging Society With a Low Birth Rate (1st Report): Focus on Child Raising in Chiba Province and Related Historical Considerations**

Yoshiko Takano<sup>[1]</sup>, Kazuko Koike<sup>[2]</sup>, Hitomi Kurihara<sup>[1]</sup>, Kanako Takagi<sup>[1]</sup>,  
Noriko Jitsukawa<sup>[1]</sup>, Satoko Nakano<sup>[2]</sup>, Chie Yamada<sup>[1]</sup>

[1] Faculty of Development and Education, Uekusa Gakuen University

[2] Faculty of Health Science, Uekusa Gakuen University

In 2016, the problems of Japan's declining birthrate and super aging society worsened; what was known as the "million shock" became a reality as the number of births in Japan fell below one million and the proportion of elderly people reached a record high.

This study is the first report of research focused on how Japan can form vibrant communities that are based on organic links in the fields of education, childcare, and health and medicine and that make full use of our university's faculty.

In this paper, the form of child raising that spread in Kazusa and Shimousa (present-day Chiba Prefecture) in the late Edo period is considered from two perspectives. First, child raising in the Edo period captured by Edward S. Morse and others was explored as a positive aspect. Second, the customs of mabiki and ko-gaeshi (forms of infanticide), based on a field survey regarding ema (votive tablets), were examined as a negative aspect.

The results revealed that in child raising, a selection was carried out between the "children to be raised," which, as evaluated by Morse and others, was based on the Japanese perspective that viewed children as a blessing, and the "children not to be raised," where parents were forced to choose between infanticide and abandoning their children to perish. Basic materials for the construction of social systems to nurture the next generation by society as a whole are presented.

**Keywords:** aging society with a low birth rate, child raising, community, mabiki and ko-gaeshi, development of the next generation